

# 大学新入生の持つ心理学知識Ⅲ：

人間科学部新入生と法学部・経済学部新入生との比較<sup>1)</sup>

丹治 哲雄<sup>2)</sup>・木島 恒一<sup>3)</sup>・山下 雅子<sup>3)</sup>

野瀬 出<sup>3)</sup>・岡部 康成<sup>4)</sup>・市原 信<sup>5)</sup>

## Misconceptions about Modern Psychology among First-year University Students in Human Science Ⅲ：

A Comparison between the Faculty of Human Science and those of  
Law and Economics

TAJIMI TETSUO, KIJIMA TSUNEKAZU, YAMASHITA MASAKO,  
NOSE IZURU, OKABE YASUNARI, & ICHIHARA SHIN

### 要旨

本学人間科学部新入生の心理学知識が彼らの志向学問分野と関係しているかどうかを検討するため、他大学法学部・経済学部新入生の心理学クイズの結果と比較した。その結果、人間科学部新入生の心理学知識は、法・経済学部新入生のそれよりはやや正確ではあったが、それでも誤った心理学的信念を多く抱いていること、両者の心理学知識間に若干の違いはあったものの、世間の誤った心理学知識の影響を共に強く受けていることが示された。こうした傾向は、前報（丹治・山下・木島・飯澤，2005）で報告した他大学理工学部新入生との比較でみられた傾向とほぼ同様であった。

### I. 緒言

前報（丹治・山下・木島・飯澤，2005）でも述べたように、著者らは、幾つかの大学、短期大学の様々な学部新入生を対象とする入門的な「心理学」関連の講義（例えば、心理学概論、心理学(教養科目)、心理学の基礎、教育心理学、行動科学、行動科学基礎論など）を担当してきた。こうした講義では、初めて

学問としての「心理学」に触れる受講生が圧倒的多数を占める。著者らは、担当する幾つかの入門的な「心理学」の講義で、大学入学直後の受講生たちに「心理学」の講義に対する興味関心を抱いてもらい、授業参加の動機づけを高めることを第一の目的として、1回目の講義冒頭など講義の初期段階で、日常一般的な知識とは異なる心理学的内容を述べた

1) 本報告の作成にあたり2006年度文教大学人間科学部共同研究費の援助を受けた。

2) 文教大学人間科学部

3) 文教大学人間科学部兼任講師

4) 愛媛女子短期大学保育学科

5) 東京家政学院大学家政学部・文教大学教育学部兼任講師

## II. 自由研究

40の短文が正しいか(○) 誤っているか(×)を問うクイズを実施している。このクイズは40問すべてが誤り(×)になるように構成されており、我々はこのクイズを「『常識』心理学クイズ」と呼称している。クイズ実施の主目的は前述の通りであるが、クイズの結果は、大雑把ではあっても、大学、短期大学で正規の心理学教育を受ける前の大学生たちが現代心理学に関する知識をどの程度正しく有しているのかを推測する資料にすることもできる(丹治・木島・山下・飯澤, 2003; 丹治他, 2005; 木島・丹治・山下, 2005)。

著者らは、これまでに、本学人間科学部人間科学科新入生の持つ心理学知識を概観することを主軸に据えて、学歴や年齢の高い社会人中心の通信制A大学教養学部学生との比較(丹治他, 2003)や、また、彼らの心理学知識が志向学問分野の影響を受けているかどうかを検討するための第1段階として、他大学理工学部新入生との比較(丹治他, 2005)などを行ってきた。その結果、人間科学部人間科学科新入生たちは、学歴や年齢の高い社会人中心の通信制A大学教養学部学生にくらべると、彼らの心理学知識は多くの誤った心理学的な信念を含んでいること、また、同年代の他大学理工学部新入生にくらべると、やや正確な知識ではあったものの、両者とも同じような多くの誤った心理学的な信念を抱いており、異なる学問の志向性の違いよりは、世間の誤った心理学知識の影響を共に強く受けていることなどが示唆される結果が得られた。

今回は、2005年度、2006年度の4月に本学人間科学部新入生に対して行われた「『常識』心理学クイズ」の結果について、同時期に実施した他大学法学部、経済学部入生の結果と比較し報告する。本学人間科学部は人文科学系の学部であり、今回比較の対象とした法学部、経済学部は社会科学系の学部である。人文科学志向の大学新入生と、法学や経済学などの社会科学志向の大学新入生との間に、心

理学に関する知識の違いが見られるのかどうか、そうした比較検討を通じて、人間科学部新入生の持つ心理学知識の特徴をさらに探ってみることとした。

## II. 方法

### 1. 「常識」心理学クイズの構成

使用した質問票は、前々報(丹治他, 2003)、前報(丹治他, 2005)と同様である。前報(丹治他, 2005)での記述を以下に再掲載する。

この「常識」心理学クイズは、心理学に関連する40の短文から構成されており、それらの短文の正誤を○×で問う形式になっている(正解はすべて×)。各短文の作成経過については前々報(丹治他, 2003)に記した。このクイズ実施の主目的は、緒言でも述べたように、新入生たちにこれから始まる「心理学」の講義に興味関心を抱いてもらい、これらの講義への参加の動機づけを高めるところにある。そのため、ここで使用している40の短文の中には、その表現に厳密さを欠くものも含まれており、論争中のテーマも含まれている。また、40の短文はすべての心理学領域をカバーしておらず、短文の数は各領域で必ずしも同数ではなく、数に偏りがあること等は前々報(丹治他, 2003)、前報(丹治他, 2005)でも報告した。使用している短文40問全文は本論文中の結果の表2に示した。

### 2. 対象者及び実施時期

#### (1) 文教大学人間科学部新入生

文教大学人間科学部新入生(以下「人間科学部新入生」と略記)は、2005年度春学期半期の共通教養科目「心理学(丹治担当)」及び2006年度の同期同科目の1回目講義に出席した受講生674名(2005年度334名、2006年度340名)のうち、人間科学部新入生337名(2005年度194名、2006年度143名)である。性別内訳は男子学生102名、女子学生235名であり、平均年齢は18.29歳(標準偏差=0.60)であつ

た。彼らの所属学科内訳人数は、人間科学科216名、臨床心理学科121名である。また、本クイズは、2005年度は2005年4月16日に、2006年度は2006年4月15日の1回目講義時冒頭に実施された。

### (2) K大学法学部・経済学部新入生

K大学法学部及び経済学部新入生（以下「法・経済学部新入生」と略記）は、筆者の1人である木島がK大学で担当している2005年度及び2006年度の「心理学Ⅰ」の受講生である。今回は、2005年度及び2006年度の同科目の2回目講義に出席した受講生1290名（2005年度718名、2006年度572名）のうち、法学部、経済学部の新入生457名（2005年度272名、2006年度185名）を分析の対象とした。性別内訳は男子学生313名、女子学生144名であり、平均年齢は18.34歳（標準偏差=0.74）である。彼らの学部内訳は、法学部163名、経済学部294名であった。今回対象にした法学部新入生の所属学科は、法律学科、自治行政学科の2学科であり、また、経済学部新入生の所属学科は経済学科、貿易学科（2006年度新入生から現代ビジネス学科と改称）の2学科である。本講義は、異なる受講生を対象に週2日開講されている。そのため、本クイズの実施日は、2005年度は2005年4月20日と21日、2006年度は2006年4月26日と27日であった。いずれも2回目の講義である。

## 3. 手続き

### (1) 人間科学部新入生

人間科学部新入生に対する手続きは、基本的には前報（丹治他、2005）と同様である。前報の記述を以下に再掲載する。

人間科学部新入生の場合は、1回目の講義を始める前に短文の印刷された用紙を受講生全員に配布し、その後、丹治が1項目ずつ読み上げ、一斉に受講生が○か×で解答するスタイルをとった。全40問解答終了後、その場で受講生たちに正解を告げ、40問の項目のうち任意の何項目かについての解説を行った。

それが終わると、解答済みテストを回収し、その後個別に点数をつけて数週間後の授業時に全員の集計結果とともに各受講生に返却した。

### (2) 法・経済学部新入生

法・経済学部新入生に対する手続きは、以下のとおりである。木島が担当するK大学の「心理学Ⅰ」は履修希望者が多いため、抽選科目となっており、抽選による履修者が決定されるのは1回目授業後になる。そこで1回目の授業では本研究のクイズ内容に触れぬようにして、ガイダンスの内容にとどめた。その上で2回目授業の冒頭に問題・解答用紙を配布して、木島が1項目ずつ読み上げ、一斉に受講生が解答するスタイルをとった。全員が解答を終了したところで正解を発表し、自分で採点することを求めた。これは、受講前の自分の心理学知識がどの程度不正確であったかを自覚してもらうためである。次にクイズの各項目について解説したプリントを配布し、自分が間違えた項目を解説プリントにメモしてもらった。その後、問題・解答用紙を回収した。全員の集計結果はプリントにして後日配布した。

## 4. 結果処理法

結果処理法も、基本的には前報（丹治他、2005）と同様である。

(1) まず、2005年度と2006年度人間科学部新入生に、現代心理学に関する正しい知識がどの程度浸透しているかを概観するため、各個人の正答数を求め、受講生全体の得点分布および平均得点（100点満点換算）を求めた。また、比較のために法・経済学部新入生の場合も同様の処理を行った。

(2) 次に、両新入生たちの間に正しく（或いは誤って）浸透している心理学知識はどのような内容なのかを検討するために、短文1項目ずつの全体誤答率を求めた。両新入生間で比較を行い、また、誤答率の高かった項目の内容について検討等を行った。

## II. 自由研究

(3) 両新入生の正答傾向・誤答傾向の異同を検討するために、両新入生の各項目の誤答率をもとにSpearmanの順位相関係数を算出した。

(4) 両新入生間で、心理学領域の違いによって心理学知識に違いがみられるかどうかを検討するために、12の心理学領域別に両新入生の平均誤答数を求め比較した。

## III. 結果

### 1. 人間科学部新入生と法・経済学部新入生の平均得点比較結果

表1に、人間科学部新入生と法・経済学部新入生の得点の基礎統計量を示した。短文は40項目であったが、表1では100点満点換算で示した。

表1. 人間科学部新入生と法・経済学部新入生の得点分布及び基礎統計量

得点範囲 (100点満点)	人間科学部 (337名) 比率(実人数)	法・経済学部 (457名) 比率(実人数)
0-9	0.0%(0名)	0.0%(0名)
10-19	0.0(0)	0.0(0)
20-29	0.0(0)	0.2(1)
30-39	1.8(6)	4.2(19)
40-49	11.9(40)	22.8(104)
50-59	34.1(115)	41.1(188)
60-69	30.9(104)	21.7(99)
70-79	14.2(48)	6.8(31)
80-89	5.9(20)	2.2(10)
90-99	1.2(4)	0.9(4)
100	0.0(0)	0.2(1)
平均点	52.7点	48.1点
標準偏差	11.3点	10.7点
最高得点	88点	100点
最低得点	25点	15点
平均正答数	21.1問	19.2問

人間科学部新入生の結果をみると、40問の設問に対してほぼ半数を越える設問に正答を示すとどまり、平均得点は100点満点換算で52.7点であった。この得点は、法・経済学部新入生の平均得点の48.1点に比べやや高め

の得点であった。両群の平均得点間でt検定を行って見たところ、有意な得点差が確認できた( $t=5.839, df=792, p<0.01$ )。

### 2. 人間科学部新入生と法・経済学部新入生の項目別誤答率結果

表2に、人間科学部新入生の誤答率(誤答人数)を誤答率の高かった短文順に示した。また、同じ短文に対する法・経済学部新入生の誤答率(誤答人数)を並列で示した。表中短文末の【\*\*】は、短文内容が含まれる心理学領域を示している。表中の実線は、人間科学部新入生の誤答率の高かった上位10項目及び誤答率の低かった下位10項目の境界を示す。

#### (1) 人間科学部新入生と法・経済学部新入生の40項目解答傾向の異同

表2に示す人間科学部新入生と法・経済学部新入生の、短文40項目それぞれに対する正答傾向・誤答傾向の異同を、Spearmanの順位相関係数を用いて検討した。その結果、両群の誤答率の順位間には、 $r_s=0.9535(p<0.01)$ という高い相関が認められた。人間科学部新入生と法・経済学部新入生の間に浸透している心理学知識は、それぞれの学部新入生間で著しい相違があるわけではなく、ほぼ同じような項目ではほぼ同じような正答傾向・誤答傾向にあることが確認できた。

#### (2) 人間科学部新入生と法・経済学部新入生の40項目別誤答率の比較

次に、各短文に対する両群の誤答率の違いを検討するために、両群の誤答率間で $\chi^2$ 検定を行った。各項目誤答率間の $\chi^2$ 値および有意性を表2の右側2列に示した。

40項目中21項目で両群の誤答率に有意差、あるいは有意差傾向が認められた。また、それら21項目中19項目(90.5%)では人間科学部新入生の方が法・経済学部新入生よりも低い誤答率を示していた。

#### (3) 人間科学部新入生と法・経済学部新入生の領域別平均誤答数の比較

表3に、心理学各領域別項目群の両学部の

表2. 人間科学部新入生と法・経済学部新入生の各短文に対する誤答率（誤答人数）の比較

項目番号	質 問 短 文	人間科学部(337名)	法・経済学部(457名)	$\chi^2$ 値	有意性
(33)	子供は大人よりずっと容易に暗記することができる。 【記憶】	90.5% (305名)	88.2% (403名)	1.357	ns
(27)	人が夜8時間眠ったとすると、その時間の2/3ほどは夢を見ているが、朝目覚めると同時に一部の内容を残してそのほとんどを忘れてしまう。 【生理心理】	90.2% (304名)	86.9% (397名)	2.089	ns
(06)	目の見えない人は、目のみえる人とは異なった鋭敏な触感覚を持っている。 【感覚・知覚】	86.9% (293名)	84.9% (388名)	0.663	ns
(37)	睡眠は人間の生存に必要不可欠のものであり、一日20分程度の睡眠で何か月も生活することは不可能である。 【生理心理】	82.5% (278名)	74.4% (340名)	7.366	**
(13)	天才と狂気は紙一重である。 【性格・知能】	77.4% (261名)	78.6% (359名)	0.139	ns
(12)	記憶は脳内の貯蔵庫になぞらえられる。我々は資料をその中に蓄え、そして必要な時にそこから引き出すことができる。場合によってはその『金庫』から何か紛失することがあり、それが忘却である。 【記憶】	74.8% (252名)	77.0% (352名)	0.538	ns
(31)	臨床心理学者として開業するためには、日本では厚生労働省の実施する国家試験に合格しなければならない。 【臨床心理】	74.8% (252名)	76.1% (348名)	0.198	ns
(25)	催眠下では、それまで決してできなかったような力技（ちからわざ）を行うことができる。 【臨床心理】	72.1% (243名)	60.6% (277名)	11.339	**
(39)	子供の知能指数と学業成績とはほとんど相関しない。 【性格・知能】	70.9% (239名)	63.7% (291名)	4.586	ns
(26)	訓練された精神科医や心理学者は、正常な人間が精神病患者を装っても数回の面接を行えばそれを簡単に見破ってしまう。 【臨床心理】	70.3% (237名)	73.3% (335名)	0.854	ns
(04)	赤ん坊にとって幸福なことに、人間の女性は元来強い母性本能を持っている。 【発達心理】	69.4% (234名)	77.0% (352名)	5.776	*
(23)	単純でつまらないアルバイトをした後、高いバイト料を貰った人のほうが、安いバイト料を貰った人よりもその作業を高く評価する。 【社会心理】	66.5% (224名)	64.3% (294名)	0.390	ns
(24)	精神科医は精神分析を用いる医師として規定されている。 【臨床心理】	61.1% (206名)	71.1% (325名)	8.736	**
(40)	幻覚や夢、あるいは病的な状態にある場合をのぞいて、正常な心理状態下では物理的に存在しないものは眼には見えない。 【感覚・知覚】	60.8% (205名)	58.0% (265名)	0.650	ns

II. 自由研究

項目番号	質 問 短 文	人間科学部(337名)	法・経済学部(457名)	$\chi^2$ 値	有意性
(21)	罪もない人に『450Vの電気ショック(100Vで人が死ぬことがある)を送れ』という命令には、多くのひとは従わないであろう。 【社会心理】	60.2%(203名)	84.2%(385名)	58.187	**
(03)	『心の研究』という言葉は、心理学を定義した最も良い短い定義である。 【心理学全般】	54.3%(183名)	58.4%(267名)	1.392	ns
(30)	教師の生徒に対する期待と、その生徒の学力とは無関係である。 【教育心理】	54.3%(183名)	61.5%(281名)	4.123	*
(15)	より強く動機づけられるほど、複雑な問題を巧みに解決できるだろう。 【動機づけ】	51.6%(174名)	64.1%(293名)	12.475	**
(34)	個人である決定を下すよりは、集団で討議して決定を下すほうが、過激な結論になりにくい。 【社会心理】	49.0%(165名)	51.0%(233名)	0.318	ns
(11)	人間の脳の記憶情報の貯蔵量は、約五千万項目程度と言われている。 【記憶】	42.4%(143名)	49.7%(227名)	4.084	*
(01)	生理学者は肉体を研究する。心理学者は心を研究する。 【心理学全般】	40.1%(135名)	57.3%(262名)	23.143	**
(10)	心理学とは、フロイトの創始した精神分析学とほぼ同じものである。 【心理学全般】	39.8%(134名)	51.0%(233名)	9.827	**
(35)	最近の睡眠科学の進歩は目覚ましく、睡眠中に測定される脳波や他の生理反応を分析することによって、夢の内容のかなりの部分がわかるようになってきている。 【生理心理】	39.2%(132名)	45.1%(206名)	2.769	+
(20)	何か助けが必要なとき、周囲に一人しか他人がいない場合よりも、沢山の他人がいたほうが援助される可能性は高くなる。 【社会心理】	38.3%(124名)	49.0%(224名)	9.055	**
(05)	多分、人間の闘争本能が戦争の根本的な原因なのであろう。 【社会心理】	33.5%(113名)	38.1%(174名)	1.735	ns
(07)	人間の視覚機能は、光学機械などとは比べようもなく精緻であることが実験的に明らかにされており、可視範囲であれば極めて正確に外界をとらえることができる。 【感覚・知覚】	32.9%(111名)	41.6%(190名)	6.148	*
(38)	人の脳は右脳と左脳に分かれてある程度の機能分担をしているが、片方の脳だけ起きていて、もう片方の脳は眠ってしまうなどということはあり得ない。 【生理心理】	32.6%(110名)	35.9%(164名)	0.904	ns
(02)	心理学は一つに体系化された科学である。 【心理学全般】	32.3%(109名)	38.5%(176名)	3.207	+
(16)	血液型(A・B・AB・O)と性格の間にはある種の関連があり、このことは心理学的に実証されたと言ってよい。 【性格・知能】	31.2%(105名)	47.5%(217名)	21.446	**

項目番号	質 問 短 文	人間科学部(337名)	法・経済学部(457名)	$\chi^2$ 値	有意性
(28)	念動（サイコキネーシス）や未来予知に関してはまだ不明の部分があるが、テレパシーに関しては程度の差はあれ、人間に生物学的に備わっている能力であり、訓練次第でその能力を伸ばすことができることが科学的に明らかにされている。 【超心理】	30.9% (104名)	34.8% (159名)	1.354	ns
(18)	平均的な赤ん坊に適切な訓練を行えば、普通より2か月はやく歩けるようになる。 【発達心理】	29.1% (98名)	40.7% (186名)	11.400	**
(29)	睡眠中に生じる『金縛り現象』は、心理学では超常現象のひとつとして研究されている。 【超心理】	26.7% (90名)	38.7% (177名)	12.566	**
(09)	子供に何かを学ばせる場合、できた時に報酬を与えることと、できなかった時に罰を与えることは、子供の学習に同じくらいの効果がある。 【学習心理】	26.1% (88名)	41.8% (191名)	20.928	**
(36)	上下が逆さに見えるメガネを長期間かけ続けても、我々が知覚する外界は逆転したままであるが、日常行動は逆転メガネをかける前とほぼ同じ程度にスムーズになる。 【感覚・知覚】	24.6% (83名)	21.7% (99名)	0.966	ns
(22)	我々はある事柄に対してまず『意見』を持ち、次に『態度』を形成し、それに従って『行動』するのが普通であり、その逆は通常あり得ない。 【社会心理】	22.0% (74名)	20.4% (93名)	0.302	ns
(19)	統合失調症（精神分裂病）とは性格の分裂した人のことをいう。 【臨床心理】	19.0% (64名)	31.1% (142名)	14.735	**
(08)	現実の場面ではなく、テレビなどで凶暴なシーンを見るだけでは、子供に余り悪い影響を与えない。 【学習心理】	12.8% (43名)	11.4% (52名)	0.351	ns
(17)	子供は善悪の感覚を持って生まれてくる。 【発達心理】	12.8% (43名)	11.2% (51名)	0.476	ns
(32)	心理学を学ぶと他人の心が容易に分かるようになる。 【心理学全般】	4.5% (15名)	10.9% (50名)	10.869	**
(14)	知能検査は人間の知能を正確にはかることができる。 【性格・知能】	3.9% (13名)	7.0% (32名)	3.588	+

\*\*p<0.01,\*p<0.05,+p<0.1;df=1

平均誤答数（標準偏差）およびt検定の結果を示した。

心理学12領域のうち、3領域ではそれぞれの学部新入生間の平均誤答数に有意な違いは

見られなかったが、9領域で有意差が認められた。有意差が認められた9領域では、いずれも法・経済学部新入生の方が平均誤答数が多かった。

## II. 自由研究

表 3. 心理学各領域項目群の人間科学部新入生と法・経済学部新入生の平均誤答数（標準偏差）及び t 検定結果

	(337名)	(457名)		
心理学領域 (項目数)	平均誤答数 (標準偏差)	平均誤答数 (標準偏差)	t値	有意性
心理学全般 (5項目)	1.71(1.17)	2.16(1.11)	5.563	**
感覚・知覚 (4項目)	2.05(0.89)	2.06(0.88)	0.123	ns
生理心理 (4項目)	2.45(0.84)	2.42(0.93)	0.361(a)	ns
記憶 (3項目)	2.08(0.75)	2.15(0.76)	1.265	ns
学習心理 (2項目)	0.39(0.55)	0.53(0.58)	3.518	**
動機づけ (1項目)	0.52(0.50)	0.64(0.48)	3.556	**
性格・知能 (4項目)	1.83(0.82)	1.97(0.80)	2.302	*
発達心理 (3項目)	1.11(0.78)	1.29(0.76)	3.198	**
臨床心理 (5項目)	2.97(1.13)	3.12(1.11)	1.857	*
社会心理 (6項目)	2.69(1.28)	3.07(1.21)	4.217	**
教育心理 (1項目)	0.54(0.50)	0.61(0.49)	2.033	*
超心理 (2項目)	0.58(0.66)	0.72(0.71)	3.228	**

\*\*p<0.01,\*p<0.05 ; df=792 ; (a) Welch法による(df=761)

## IV. 論 議

### 1. 2005・2006年度人間科学部新入生の心理学知識：2003年度及び2004年度結果との比較

2005・2006年度人間科学部新入生の平均得点は100点満点換算で52.7点であり、今回の場合も必ずしも高い得点とは言えず、これまでと同様に現代心理学について誤った知識や信念を持つ新入生が多いことが伺えた。今回の新入生の平均得点は、前々報（2003年度）の52.7点とは、まったく同じ平均得点であった。また、前報（2004年度）の50.4点にくらべやや高い平均得点であったが、その差は顕著なものではなかった。さらに、本報告の誤答率上位10項目の中で、2003年度の誤答率上位10項目中に共通して含まれていた項目は9項目あり、また、2004年度でも誤答率の高かった10項目中に共通して含まれていた項目は8項目みられた。そこで、本報告の受講生と2003年

度、また2004年度受講生の40項目それぞれに対する誤答率を用いてSpearmanの順位相関係数を求めたところ、いずれの場合も高い相関が認められた（本結果と2003年度結果： $r_s=0.9633$ ,  $p<0.01$ ; 本結果と2004年度結果： $r_s=0.9793$ ,  $p<0.01$ ）。これらのことは、新入生の誤った心理学知識の傾向は、この4年間の人間科学部新入生間で特に大きな相違があった訳ではなく、ほぼ同じような項目、同じような心理学領域で同じような誤答傾向（正答傾向）を示していたと言えよう。また、40項目中で回答者の50%以上の学生が誤答を示していたのは、2003年度では17項目、2004年度では18項目あり、今回の報告ではそのような項目は18項目みられた。こうした傾向はこの4年間でほぼ同様の傾向であった。とりわけ誤答率の高かった項目群は、今回の場合もこれまでの報告と同様に「科学的ではない通俗的な表現で記述された短文であり、また、内容的にも分かりやすく世間受けのする誤った心理学の信念を導きやすい短文群」と言ってもよいであろう。

### 2. 人間科学部新入生と法・経済学部新入生との比較：前報他大学理工学部新入生の結果比較も併せて

次に、人間科学部新入生と今回比較の対象とした他大学法・経済学部新入生との異同についてみてみたい。平均得点でみると、人文科学志向の人間科学部新入生の方が、社会科学志向の法・経済学部新入生よりも有意に高い平均得点を示していた。また、40項目毎の誤答率を比較すると、40項目中21項目で両新入生間に有意な差、あるいは有意差傾向がみられ、その21項目のうち19項目は人間科学部新入生の方が低い誤答率を示していた。さらに心理学12領域別の平均誤答数の比較でも、有意差が認められた9領域全ての領域で人間科学部新入生の方が低い平均誤答数を示していた。人間科学部は、心理学を含む人文科学系の学部であり、法・経済学部は、社会科学



系の学部である。他の要因も考えられうるとしても、大学新入生たちの志向する学問領域の違いが、こうした得点差、誤答数差に影響を及ぼしていた可能性は十分考えられる。こうしたことは、前報（丹治他，2005）で報告した自然科学・工学志向の理工学部新入生との比較に見られた傾向とほぼ同じようなものであった。ただ、この場合も、前報（丹治他，2005）でも述べたように、大学新入生の持つ心理学知識は、彼らが志向する学問領域によってある程度の影響は受けるものの、人文科学領域志向の人間科学部新入生であっても、多くの誤った心理学的な信念を抱えていること、また、彼らの心理学知識は、自然科学・工学志向の理工学部新入生や、社会科学志向の法・経済学部新入生のそれよりもやや正確ではあったが、新入生の学部間の違いを強調するよりはむしろ、同世代である彼らの持つ心理学教育を受ける前の知識は、学問領域の志向性の違いを越えて、世間一般に浸透している誤った心理学知識の影響を共に強く受けていると考えた方が妥当であるように思われた。

### 3. 今後に向けて

これまでの報告では、学歴、年齢の高い社会人中心の通信制大学学生や、また、幾つかの大学の異なる学部新入生との比較を通じて、本学人間科学部新入生の持つ心理学知識の特徴について述べてきた。現在、筆者らは本報告と同様の方法を用いて、各々が関係する大学、短期大学で、新入生の心理学知識についてのデータを継続的に収集している。学部としては、これまでの報告で扱った人間科学部、教養学部、理工学部、法学部、経済学部以外にも、教育学部、文学部、工学部、外国語学部、人文学部、文理学部、家政学部、人間文化学部、通信教育部、保育学科（短期大学）などの新入生たちの心理学知識に関するデータを蓄積しつつある。また、2006年度からは、彼らの持つ心理学知識の「確信度」指標を追加してデータ収集を行っている。今後、こう

したデータの分析を通じて、彼らはなぜ多くの誤った心理学知識や信念を抱くようになったのか、また、彼らの持つ誤った心理学的信念は、どの程度確信度の強い信念になっているのか、さらに、そうした誤った心理学知識や信念の修正のためには、大学新入生たちに対してどのような心理学教育を行うのが適切なかを検討できればと考えている。これまでの一連の報告が、大学新入生に対する入門的な「心理学」の講義構築の手助けになることを期待したい。

## V. 文献

- 1) 木島恒一・丹治哲雄・山下雅子（2005）. 「心理学」履修前における大学生の心理学知識 日本心理学会第69回大会発表論文集, 1270. (Kijima, T., Tajimi, T., & Yamashita, M.)
- 2) 丹治哲雄・木島恒一・山下雅子・飯澤未来（2003）. 大学新入生の持つ心理学知識Ⅰ：人間科学部人間科学科新入生の場合 教育研究所紀要（文教大学教育研究所）, 12, 85-92. (Tajimi, T., Kijima, T., Yamashita, M., & Iizawa, M. (2003). Misconceptions about modern psychology among first-year university students in human science I. *Bulletin of Institute of Educational Research (Bunkyo University Institute of Educational Research)*, 12, 85-92.
- 3) 丹治哲雄・山下雅子・木島恒一・飯澤未来（2005）. 大学新入生の持つ心理学知識Ⅱ：人間科学部人間科学科新入生と理工学部新入生との比較 教育研究所紀要（文教大学教育研究所）, 14, 95-103. (Tajimi, T., Yamashita, M., Kijima, T., & Iizawa, M. (2005). Misconceptions about modern psychology among first-year university students in

## Ⅱ. 自由研究

human scienceⅡ: A comparison  
between the faculty of human  
science and that of science and  
technology. *Bulletin of Institute of  
Educational Research (Bunkyo  
University Institute of Educational  
Research)*, 14, 95-103.